

## 昔の暮らし

戦後六十数年を経た今私達の生活はずいぶん進化して参りました。

戦前は村から一步も出たことの無いままに、生涯を閉じる人も多数居られましたが、いまや自動車、飛行機、電車など行動範囲の広い楽しみを享受される方が多くなりました。

思えば戦前の貧しい暮らしや、戦時中又戦後のひどい思いを乗り越えて歩んでこられた先人たち、特に痛ましいのは私たちを守るための使命感を持って戦死された方々の経過があつて、このように豊かに過ごせるようになってきているのです。

さて昔の生活はどのようであつたか、振り返つて思いを新たにしておりにふれ、感謝の気持ちを持ち心の貧しさを取り返す糧にしたいと念じています。

平成二十年四月

編集者 小田 照幸

## 第一章 住居

今はこの家でも、客間、応接間、老人部屋、子供部屋、調理場に仕切られ、個室になっていますが、昔は大きな大黒柱と小国柱がでんと立ち、それにふさわしい桧の役柱や鴨居、敷居があり、障子をはずせば、風通しのよい大広間になるよう田の字型に作られていました。

間取り

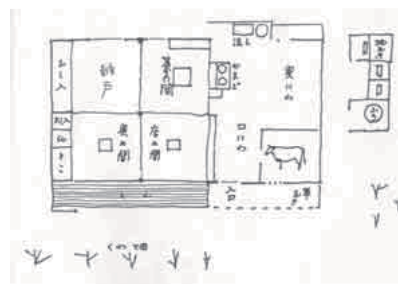
●奥の間（客間）

床や仏壇があり、

朝夕の詣でる以外は

冠婚葬祭、来客があつたときに使われます。

それから紋日るときお供えするときや、ひな壇など飾る時などにも使いました。



●店の間（たてぎ）

板の間になっていました。養蚕時には蚕の棚を、稲や麦の収穫時には収納場所として使いました。

●納戸（ちょうだい）

家族の寝室で、日当たりも悪く冬は寒く、夏は蚤や蚊に悩まされました。夏は蚊帳を吊つて寝るのです。

●茶の間（なべぎ）

囲炉裏のある間で中央もしくは、四角（よすみ）の一角に一メートル四方位に床が切り取られ、床下から石と土で積み上げ、上は木枠で囲み、中では火を焚くようになっていました。中央に五徳（三徳）（カナオ）といつて鉄製の三脚の鍋をかける台があり、天井近くの火棚（火の粉の上昇を止める棚）から自在鍵が下がつていて、



それに鍋やかんを掛け、煮炊きをしたり、湯茶などを沸かしたりしました。

毎日火を焚くので茶の間はもちろん天井まで煤けて真っ黒に光っていました。そのため家の害虫やカビを防ぐことが出来ました。いずれにしても囲炉裏は家族が揃つて暖を取り食事をしながら話し合い、相談事をし和やか

な雰囲気を作り、絆を深め合う場所でした。

又夕食後テッキ（網）で餅を焼いたり、サツマイモを焼いたり、銀杏や栗の実を灰の中にいけこみ爆発して驚いたり、それらを食べながら昔話をしてもらったり、ランプやカンテラの灯かりを頼りに予習、復習などをする勉強部屋になったり、お父さんは縄ない、俵とか草履やわらじをつくり、お母さんは、柿の皮むきや、繕い物などの作業場になったりしていました。風呂でも沸かすと隣近所の人たちが来て、世間話に花を咲かせ、情報交換になる社交の場でもありました。

最近よく「温かい心が失われた」と聞きますがこの「囲炉裏のほだ火」が姿を消してから家族のあるいは近隣の人々の心がばらばらになったのではないのでしょうか。

### ●にわへ土間

入り口へ玄関と裏口を結ぶ通路であり、かまど（くど）を中心

とする炊事場でもあり、牛の餌作りと給餌場でもあり、稲の取り入れのときには収納場所であり、作業場でもありました。

奥にわには稲こき、糶摺り、米搗き、唐臼、

唐箕等の道具が備え付けられていました。味噌蔵のない家は、味噌、醤油、漬物などの樽桶も並んでいました。

にわの入り口には大戸が有り、この大戸はめったに開けません。

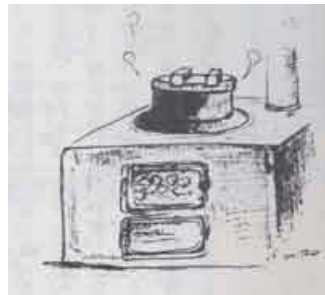
大戸の中に小さなくぐり戸があり、日常はここから出入りしていました。くぐり戸には障子戸と板戸がついており、昼間は障子戸で、夜は板戸に栓をして戸締りをしました。

### ●台所

調理は茶の間（なべ

ざ）と、にわにあるくど（かまど）に板敷きでしました。くどの近くにながしへ木製か石をくりぬいたものゝがあり、そのそばに大きな水がめ

がありました。井戸か谷川から運んだ水を溜めて使いました。この水汲みが主婦や子供の仕事で、天秤棒の両端に綱をくくりつけ、そのさきにかぎをつけ、たんごをひっかけて水汲みをしました。



谷川の水汲み場をつかいとってここで、米や麦、野菜、食器などを洗ったり、洗濯などもしたりして隣近所のおしゃべり場でもありました。

### ●便所（せんち・ちようず）

家から数メートルはなれて直径二メートル位な肥えつぼを造り、

その上に板囲いをした小屋があつて、大、小便をするようになっていました。小便所は梯形型のじようごで女の人は後ろ向きになって立小便でした。大便所は床に長方形の切り口があり、これを跨り前方に手を支える傾斜した板にすがりついて用を足していました。下を見ると汚い物がいやでも目に付きます。

落とし紙は切り藁か、山から取ってきた「くず」や「ほうた」の生干しを使っていました。夜は真っ暗でしたのでアンチョを下げているのですが、気味が悪くて怖い思いをしたものです。



小さい子は兄ちゃんやお姉ちゃんに灯りを  
持って付いてもらっていったものです。

やがて懐中電灯が出回ってきたときは、そ  
の灯りの役目は大変楽になりました。

### ●風呂

風呂の形式は鉄  
砲風呂か、長州風  
呂か五右衛門風呂  
でした。殆んど露  
天風呂に近かった  
ので、火の粉が裸  
に飛んできたり、



雨や雪、落ち葉が舞い込んだりしました。

風呂を焚いたら近所に呼びかけ、お互いに  
もらい風呂をしました。もらい風呂に出かけ  
るときは、薪を抱えていきます。先客が有ると、  
囲炉裏端で雑談を交わすこれが又楽しみでし  
た。

### ●屋根

昔は茅葺屋根が殆どでした。夏は涼しく冬  
は暖かく住み心地はよいが、火災の場合は類  
焼しやすく、大惨事を起こすことがあります

た。耐久年数も短く材料によっては、小麦藁  
で二十年、茅三十年、笹五十年と云われてい  
ました。

屋根の葺き替えは総代（区長）さんに申し  
入れ、部落で順番が決められていました。茅  
の山の口が決められており、勝手に刈っては  
いけない決まりがありました。

来年は〇〇家の屋根葺  
きだと決まると、十一月  
下旬山の口の日には、鶏  
の鳴き声を合図に、部落  
総出の合力（ごうろく）  
によって茅山に出かけ、  
刈り取ってその家に持つ  
て行きます。その家では屋ごはんを炊き出し、  
大盤振る舞いをします。



翌年梅雨明けの頃噴き替えをしますが、こ  
のときは太縄を一把持つて合力に出かけます。  
何十年も経っているの、煤で真っ黒になっ  
た茅を剥ぎ取り束にして転がします。

上に居る人も、下に居る人も真っ黒になり  
ますが、葺き替え作業中は水で手や顔を洗う  
と、雨漏りがすると忌み嫌い、洗われないこ

とになっています。

大正から昭和にかけて、ササ板へこけら  
屋根や、杉皮屋根に変わり、戦前ごろより  
トタン屋根、さらに進んで瓦屋根になってい  
きました。

### ●屋根裏

養蚕の時期以外は養蚕の用具や、炭並び炭  
俵。米俵・縄その他雑多なものが置いてあり  
ました。タバコの生産地方ではタバコの葉が  
束ねて積んでありました。

### ●ともし火

客間に  
は来客  
時、行灯  
が使われ  
ていまし  
た。四角

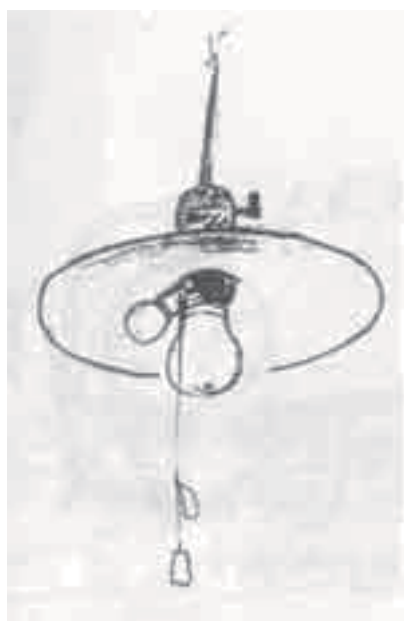


な木の枠に紙を貼り、中にカワラケをいれそ  
れに菜種油や椿油を入れて、燈芯を浸して灯  
りにしました。

茶の間ではランプが中央に吊り下げてあり  
ました。夕方になると煤で真っ黒になった

ホヤ拭きは子供の仕事で、よく割って叱られたものでした。

外に出るときは提灯やアンチヨを使いまし



た。石油が入るようになって、コトボシヘカ  
ンテラ〜といってブリキで作った丸型のもの  
で、布の芯に石油をしみこませ、灯かりをつ  
けました。

上六人部の地域に電灯がついたのは大正五  
年頃からと聞いておりますが、一般の民家に  
ゆきわたるには大東亜戦争前後で、最後は平  
石地区の戦後二十年十二月という記録があり  
ました。他所とは三十地区の戦後二十年十二  
月という記録がありました。他所とは三十年  
もあとのことだそうです。

灯かりは殆んどの家では十ワット一個で辛

抱し、養蚕期に臨時灯を一個増やす程度でし  
た。

## 衣服

### ●子供の服装

私の父の時代大正初期の小学校の卒業写真  
を見れば、洋服を着ているのは、学校の先生  
だけで、しかも詰襟、子供はみんな自分の家  
で織った母  
親好みの綿  
の着物に帯  
をしめ、鼻  
汁やよだれ  
の汚れを防  
ぐ、首から  
膝まである  
これも自家  
製の島の前掛けをしていました。



かばんなどは無く風呂敷に教科書をつつみ、  
入学した当初だけ、日本手ぬぐいを小さく折っ  
て帯にはさけ登校したということでした。

三大節といつて新年（正月）紀元節（建国  
記念日）天長節（天皇誕生日）にはご真影（天  
皇と皇后の写真）の拝賀があり、分限者の

子供は袴をはいて登校していたのを、高嶺の  
花とうらやましく眺めたものだと言ったのが  
ありました。

さて私たち昭和十年代の子供たちは、和服  
やら洋服などさまざまでした。遊びや通学に  
汚れたらそれを洗濯し、ぼろぼろになったら  
つくろい、兄から弟に姉から妹に、着せていっ  
たお袋の苦労も大変  
だったと思います。

「いい着物 着ると  
家でも かしこまり」  
どの家でも長男より  
次男坊以下が、腕白  
だったのはそのせいか  
もしれません。ぼろぼ  
ろになるとそれを雑巾  
にして使いました。



昭和に入ってからには徐々に五つボタンの服  
装に変わっていききました。

冬の通学時はラシャ地のマントを羽織って  
いきました。戦時に入ってから服などは軍事  
色が主となり高学年になれば脚ハン（ゲート  
ル）など巻きました。戦時末期においては防  
空帽を携帯していました。